

書評

塩村 耕著

『こんな本があった！ 江戸珍奇本の世界 古典籍の宝庫岩瀬文庫より』

加藤 弓 枝

はじめに

西尾市岩瀬文庫において新目録作成のための悉皆調査が始まったのは、今から七年前の平成十二年六月のことである。調査員を募る塩村氏お手製のチラシを、文学部のあらゆる場所に貼って歩いたことが、なつかしく思い出される。それから現在に至るまで、調査員の一員として岩瀬文庫に通い、この悉皆調査に、文字通り「命をかける」、氏の姿を見てきた。本書は、調査を通して、塩村氏が出会った、江戸時代の珍本奇本を一般向けに分かりやすく紹介するとともに、文化的国家、あるいは人間としてのあるべき姿を説いた書でもある。そこで、七年間、氏の姿を近くで見えてきた者の一人として、調査のなかで感じたことを思い出しつつ、本書の内容について紹介し、若干の所懐を述べてみたい。

本書は、「遊び・趣味」・「暮らし」・「学び・研究」の部立別に五十六冊の和本を取り上げる。和本一点につき、見開き面（一部片面）が割かれ、右頁冒頭には書名、版写の別、冊数が記され、つづいて一三〇〇文字程の軽妙洒脱な解説、左頁上半分には図版、末尾に書誌データが配されている。本書は、そもそも中日新聞の文化欄において、二〇〇六年九月十三日号より二〇〇七年四月三日号にかけて週に一度連載された「江戸面白本の世界 岩瀬文庫の調査から」の内容を、大幅に加筆したものである。ゆえに、その本の魅力について研究者ならずとも分かるように語られている。書名の上には、当該書の内容を端的に表した魅力的な一文が付されている。例えば、『続近世崎遊伝』には、「奇人好きの変人による回想譚」とある。和本と言えば、難しい、取っつきにくいといった印象が一般的であろうが、この惹句を読むだけで、そ

ういった先入観が根底から覆される。他にも、次の如き見出しが綴られている。

SF的なユートピア紀行 『磔溪猿馬記』

元氣老人の伊勢参宮紀行 『筑紫紀行』

悪代官登場 『安永三方出府願書写』

武士の生き方マニユアル 『八盃豆腐』

富士山噴火で離ればなれとなった男女が再会

『枕蚊帳』

攘夷の時代の悲しき新兵器たち 『榴弾私説』

若き日の頼山陽がアルバイトで書写した本

『訳官雑字簿』

冒険譚もあれば、恋愛譚もありと、目録にならば各本の見出しを読むだけでも、さまざまなことが想像がされて面白い。取り上げられている書物たちは、氏が述べるように、「おそらく誰も——研究者でさえ——存在を知らなかった、初めて世に出る資料」（はじめに）より）ばかりである。いや、「存在を知ろうとしなかった」(「氣づけなかった」)資料とも言えるだろうか。

例えば、「SF的なユートピア紀行」と銘打たれた『磔溪猿馬記』（一八二七年成）は、微小化した著者が自身の庭園の山水をあちこちめぐり、美しい風景や不思議な人々と出会うという紀行文である。幾千人にも列なっ

行き交う黒き姿の旅人（アリ）、禪もつけない赤裸の男たち（カエル）、薄衣をまとった美女たち（トンボ）、尻に松明をはさんだ者（ホタル）など、ユニークな怪人たちが登場する。本書について氏は次のように語る。

書中にはなかなか巧みな詩歌が織り込まれ、風景の描写も生彩がある。何よりも、自らを縮小して、自家の庭園を一大天地として活写するという仕掛けが面白い。莊子風の寓言的架空話は江戸期に必ずしも珍しくはないが、これほどのリアルさは珍しく、一奇書といふべきだろう。

主人公が微小化する物語といえば、スウェーデンの女流小説家セルマ・ラーゲルレーヴ（一八五八—一九四〇）の『ニルスのおしぎな旅』（一九〇六年）が知られる。主人公の少年が妖精によって小人にされ、ガチョウやガンの群れと一緒にスウェーデン中を旅する物語である。同趣向の物語が、およそ八十年前も前に日本にすでに存在したことに驚きを禁じ得ない。しかも、主人公の姿が巨大化したり、矮小化したりする物語の多くは、『不思議の国のアリス』（一八六五年刊）に代表されるように、児童向けに描かれたものが多いが、本書は内容に仏教的な教訓ないし寓意が込められ、和漢・古典の典拠が多数ちりばめられており、子ども向けの書物ではない

ことは明らかである。それもそのはずで、著者墨化道人は、真宗高田派本山専修寺の十九世住職であり、本書をもとに三次にわたって学僧を対象とした講義を行ったことが、書き入れの内容により分かるという。かくのごとき、世界水準で考えてみても不思議な作品が、近代以前の文献には多々存在する。それら埋もれた古書たちを、氏は極めて優れた嗅覚によって、この現代に甦らせているのである。

世に稀覯本・珍本を貴ぶ風潮はあるが、本書で取り上げられているものは、その書の持つ金銭的価値ではなく、文化的価値によって選ばれた古書たちである。文化的価値といっても、著名な人物が関わった文献という意味ではない。現代の感覚では到底想像することのできない、書物に関わった人々や時代の息吹を感じることでできる資料という意味である。著者の語を借りれば「こんなものがあるとはおもひもかけなかったたぐいの資料群」（はじめに「より」と言えよう）。

著者より以前、そういった面白い資料からは「におい」がするのだという話を聞いたことがある。無論、この「におい」は誰にでも感じるができるわけではない。毎年、一年の半分以上を岩瀬文庫の調査室で、あらゆる分野の龐大な古書たちと向き合って過ごしてきた著者だけ

らこそ気づくことのできる「におい」なのである。

二

ところで、もう一つ本書において注目すべきは、数多くの古書と対話してきた著者ならではの、書物観・人生観が記されている点である。それは、冒頭に掲げられた「江戸時代の書物について」のなかにおいて次の順で展開される。

一、書物の今昔

二、人間と書物

三、多彩な昔の書物文化

四、岩瀬弥助と岩瀬文庫

まず、「忍者はなぜ巻物をくわえているのか」という問題を通して、卷子本の優れた性質を述べるとともに、近代以降の日本人がその耐久性に優れた装丁を、いとも簡単に捨ててしまったことを次のように歎く。

そもそも、現代大量に作られ流通する書物の中で、いったいどれだけのものが百年後の読者のことを、考慮しているだろうか。多くの書物は耐久性のない酸性紙を用い、脆弱な接着剤による製本で仕立てられている。（中略）つまり、高くてもよいから耐久性のある書物を読みたい、という世の中になってい

ないのである。(中略)その書物観の背景にある世界観の変化には、健全でないものが含まれているように思う。

現代書物の耐久性のなさについては、同感する者が多いであろう。多くの所蔵機関では、古書をコピー機で複写することを禁止しているが、近代以降の書物に関しては専門図書館でもない限り問題になることが少ない。しかし、複写をする際に、慎重にならざるを得ないのは、近代以降の書物の場合が圧倒的に多いのである。ノドの部分鮮明に印刷するためには、本を開いた状態で、上から少々強く押さなければならぬ。強く押せば、背が割れる危険性が当然高まる。実際、図書館で、背が割れて分解しかかった状態の本を見かけ、何ともいたたまれない気持ちになることがある。そういった書物を見るたびに、古書を大切に保存する行為と、脆い現代の書物の装丁を有り難たがることとの間に矛盾を感じるのである。現代の社会は、前近代の人々の書物を保存することには注意を払ってはいるが、それと同等に大切な現代の書物の保存を軽視する傾向があるのではないかと思われる。和書は、たとえ強く開いたとしても、料紙自体が痛むことはまずない。綴じ糸が切れることはあるが、そもそも料紙を痛めないように配慮され、用い

られたものが綴じ糸である。近代の書物と違い、一度切れても簡単に補修することが可能である。原装の綴じ糸でもない限り、さほど留意することもない綴じ糸の破損に目くじらをたてるのではあれば、もう少し真剣に、保存を考える上で現代の書物の持つ問題性について考える必要があるのではないだろうか。脆弱な装丁に疑問を持たない現代社会には、現代の思想を後世に伝えようとする意識が希薄であるかのように感じる。書物を未来へ伝えるという点から言えば、前近代の人々の方が、現代の我々よりもよっぽど優れているのではないだろうか。

三

著者は本書のなかで座右の銘とも言うべき、二つの言葉について紹介している。「ホモ・メモル・モリ (Homo memor mori 〓 死を知る人)」と、「ホモ・リブラリウス (Homo librarius 〓 本の人)」である。

「ホモ・メモル・モリ (Homo memor mori 〓 死を知る人)」とは、「人間とは死の概念を有する唯一の動物」であるという人間観を表すラテン語であり、著者とその同僚による造語である。著者は次のように述べる。

人間が書物を作り、またそれを読むのは、じつはホモ・メモル・モリであるからにはかならない。人間

は死んだらそれでおしまい、というのではあまりに寂しい。悲しい。そこで個体としての死を乗り越えて、異なる世代間のコミュニケーションをとる方法を編み出した。それが書物なのである。

このような書物を通して「異なる世代間のコミュニケーション」にかかわるすべての人々を、著者は「人間の中の人間、ホモ・メモル・モリの中のホモ・メモル・モリ」として、「ホモ・リブラリウス (Homo Librarius ≡ 本の人)」と称している。そして、「ホモ・リブラリウス」の一人、岩瀬文庫の創設者、岩瀬弥助(一八六八〜一九三〇)について取り上げる。

著者は岩瀬文庫の特徴として次の三点を指摘する。

- (一) 当初より一般に対して公開された私立図書館であること。
- (二) 洋装本よりも、和漢および朝鮮の古典籍を主体とする収集であること。
- (三) 書物を収めるために、異様なほどに堅牢な構造の書庫が建造されたこと。

この特徴の意味していることに関して、弥助がその考えを書き記した資料はほとんどなく、彼の意図を具体的に知ることはできないという。しかし、文庫設立を記念して建立した地元の伊文神社の石灯籠に刻まれた銘文に

よって、著者は弥助の思いを次のように読み解いている。すなわち、設立した文庫を「身にも人にも施」すことによつて、「不朽に伝」えようというのだ。つまり、集めた書物を個人的に楽しむのではなく「一般社会に公開提供すること」、同時にそのことによつて書物を「未来永劫に保存してゆくこと」、この二つの理念が明確に表現されている。

弥助は、他に類を見ない「書物の公開・保存」を行った点において、まさしく、「ホモ・リブラリウス (Homo Librarius ≡ 本の人)」と言えるのである。

四

さて、氏は、岩瀬文庫の悉皆調査とともに、記述的書誌のデータベース化にも取り組んでいる。記述的書誌とは、書物・文献資料の内容を、可能な限り詳細に記した書誌のことをいう。そのねらいは、「各古典籍の内容や書物としての特徴を、できるだけ詳細に世の中にしらしめること」(江戸時代の書物について)より)にあるという。

ではなぜ、「世の中に知らしめる」必要があるのか。

氏は、「千号記念国語国文学界の展望 近世小説(前期)」(『国語と国文学』第八十四巻第五号、平成十九年

五月刊)のなかで、国書総目録、国文学研究資料館によるマイクロフィルムと書誌データの収集公開、日本国語大辞典の三つが、それ以前と以後の仕事の質を大きく区別する道具であり、画期的な偉業であると指摘する。そのうえで、「そのような研究基盤の向上こそが、学問の進歩につながるものだろう」と述べている。

つまり、記述的書誌データベースの整備こそ、氏が考える「研究基盤の向上」につながる学問であるのだ。ゆえに「世の中に知らしめる」必要があると説明するのである。氏は、右の論文のなかで、記述的書誌データベース整備の意義について、匿名の資料の著者が、内容を精読した結果判明した例などを挙げた後に、次のように記す。

これらのような資料の場合、いわゆる書誌を記しただけでは不十分で、内容にまで踏み込んだ記述がどうしても必要となる。日本全国の文庫・図書館にある古籍において、そのような内容記述的な書誌データベースが整備されるならば、我々は闇の中にある日本古籍の全貌を明らかにすることが可能となる。その中から、書名からは思いも掛けないような重要な内容をもつ資料の存在が発覚し、あらたな発見につながるはずだ。(中略)もしも数十組のグ

ループが同じことを各地の図書館・文庫で進めてくれたならば、ほぼ全ての古籍を網羅することが出来る計算になる。そんな日が実現すると、それ以前とは全く期を画するような、新たな研究状況が出現することだろう。

岩瀬文庫の書誌データベースは、近年中には公開が開始される予定となっている。いかなる発見が待ちかまえているのか、今から胸が躍る。氏は、今まさに大きな布石を打たんとしている。

おわりに

岩瀬調査が始まったばかりの頃、氏は次のような心構えをしばしば説かれた。

この世のすべての書物には、それが書かれた理由が必ず存在する。それを明らかにしなさい。

言い換えれば「古人と対話せよ」という意になるだろう。資料の性格を把握するためには、書物全冊に目を通すのみならず、時には編著者の伝記、諸本の情報、そこに記されている地名など、多数の事項について調べる必要も出てくる。時間をかければ不可能なことでもないが、調査にも人生にも無尽蔵な時の流れがあるわけではない。要領よく、簡潔に、そして何より第三者が読んでも

分かるようにまとめる必要があるのだ。

七年の歳月が流れ、幾分かは書誌の取り方——古人との対話の仕方——がうまくなったと考えていた。しかし、本書を読み、「見ぬ世の人を友とする」氏の領域にはまだまだ遠く及ばないことを思い知らされた。ただ淡々と書誌データを取るのはいけない。何より重要なことは、死者とのコミュニケーションをとることなのである。

本書において、氏は、次々と死者たちをあざやかに甦らせ、「人は書物の中で生き続ける」ことを、現代の我々に示している。まさしく、氏こそ現代の「ホモ・リブラリス (Homo Librarius ≡ 本の人)」なのである。

〈二〇〇七年四月刊、家の光協会、A5判一二八頁、

定価一八〇〇円〉

(かとう・ゆみえ／豊田工業高等専門学校)